

エデュコ **Educo**

No.48
2019年

有吉正博さん

関東学生陸上競技連盟 会長

巻頭インタビュー p.2



知っておきたい教育 NOW p.4

- ①学校における働き方改革の推進
- ②校長として進めるべき「学校の働き方改革」

きょういく見聞録 p.8

先の読めない時代を生きる力をつける

地球となかよしトピックス p.10

博物館でまなぶ子どもたち

Information 北から南から p.12

第16回 地球となかよしメッセージ入賞作品発表 p.14

地球となかよしゼミナール p.18

自分の目と頭の力を使って、
樹木のそっくりさんを発見 (1)

コラム p.19

小学校英語の新段階

ほっとな出会い p.20

京都教育大学名誉教授

真神 仁宏さん



▲第95回スタートシーン（2019年1月2日）

伝統の襷を つないでいくために

たすき

関東学生陸上競技連盟会長

有吉 正博さん

日本独自のスポーツ、駅伝

箱根駅伝の魅力は山ほどあります。駅伝は日本で独自に誕生したスポーツで、昨年100年目。箱根駅伝は今年で第95回大会を迎えました。先人たちが築いてきた、歴史ある日本のオリジナリティなスポーツであることも魅力のひとつです。今回も国道1号線などの公道を全面的に使わせていただきましたが、今も続いているのは、多くの方々が開催を認めてくださっているからです。

箱根駅伝の魅力

ロードスポーツ、特に長距離マラソンや競歩も含め、自分の生活圏で行われる競争はわかりやすく、身近に感じられます。だから選手たちにとっても、人工的な競技場にはないアウトフィールドならではの魅力があるのではないのでしょうか。それからもうひとつは「リレー」であることです。一人ではなくチーム性があり、フィニッシュラインまで襷をつないでいくのも魅力です。

競技する楽しさを味わえるように
毎年「箱根駅伝シンポジウム」を開

催しています。昨年末に開催された会では、チーム作りについてなど話題になることはいろいろとありましたが、特に課題として挙げたのは選手たちの「心・技・体」についてでした。「陸上競技は持久力勝負だ」とよく言われます。スタミナ養成やスピード養成などフィジカルな部分のトレーニングが重んじられて話題になり、メディアも例えば「各大学チームは月に何百キロ走った」といったことなどが話題になります。また、技術的なことについては選手たちのフォームや技術的改善についてなどが取り上げられました。駅伝では、コースや選手たちの特性に応じて山なりに強い選手や下りに強い選手などを配置します。箱根駅伝の場合、どこもコースが長いのですが、アップダウンが多いなど若干の違いがありますから、コースや選手たちの特性に応じた技術的改善などが非常に大きな課題です。

また、今はメンタル面も非常に注目されていますから、メンタルトレーニ



ングやメンタルリハーサルの第一人者を講師としてお招きしました。私も含め、技術や心、体力はみんな大事だと思っ

て、安心して競技に向き合える心理的なアプローチができないだろうかとも思うんです。今日、世界的にスポーツ界でも、選手たちの「心・技・体」を

いかに若者たちを前向きに引っ張っていくか？

—本当に質の高いスポーツを楽しむ

箱根駅伝は選手が10人いれば区間は成り立ちますが、10人の選手を生み出すには補欠や付き添いの選手も必要です。そしてチームによっては補欠にも入れなかつた選手もいっぱいいるわけ

とってどんな役割を果たせるか？」と目的意識をもてるようなチーム作りが必要です。すると結果として、「あの大学チームは楽しくやっているな」と

さきほどお話ししたメンタルリハーサルの専門家も、シンポジウムでの最後のまとめとして、「楽しさ」を一番に挙げていました。楽しさって、「本当に質の高いスポーツを楽しむ」って

本当に質の高いスポーツを楽しむ

感じさせるのが大事じゃないかな。監督から怒られるんじゃないかとビクビクしながら受ける指導は、今どきの若い学生さんには似合わないと思えます、たぶん。だから今の指導者が苦労

つながり 人的ネットワーク作りの大切さ

チームを作り、指導スタッフを集め、それから選手を集める。指導スタッフをきちんと指導してOB会組織をまとめ、OB会からも応援していただく。学生たちは全国から集まって来て

さまざまな「縁の下の力持ち」の活躍

参加者は箱根駅伝を走る大学生だけではありません。例えば駅伝とは全く関係ない、女子大学から幹事が来てく

◀箱根駅伝予選会で号砲を鳴らす有吉会長



PROFILE

1947年福岡県生まれ。東京教育大学生時代には、自身も4年連続で箱根路を走った。東京学芸大学名誉教授、帝京科学大学教授。専門は体育学、スポーツ科学。主な著書に『10kmマラソントレーニングマニュアル』『箱根を走った勇姿たちは、今』など。

れたり、連盟傘下の学生たちが協力してくれたりしています。それ以外にも箱根駅伝に出場できなかったチームなどが、沿道の交通整理や荷物の運搬などの役割を担ってくれています。また、開催には警備費用もかかります。警備会社が箱根駅伝の協賛会社として入ってくれています。必要な箇所にはセキュリティ専門の人も入っています

全国の多くの方々に応援していただいていることには感謝しかありません。引き続き温かいご声援、ご支援をお願いいたします。

学校における働き方改革の推進

学校を取り巻く状況

今回の学習指導要領の改訂は、子どもたちが予測困難な未来社会を自立的に生き、社会の形成に参画するために必要な資質・能力が確実に育成されるようにするために行われた。しかし、教員勤務実態調査（平成28年度）から、小学校、中学校とも全ての職層での勤務時間が10年前より増加し、長時間勤務の実態が明確になった（表1）。経験の浅い若手の教員の増加とともに、暴力行為や不登校（図1・2）をはじめとする健全育成に関わる指導の困難さ、多様化する保護者や地域の要望への対応など苦慮することも少なくない。このようなことを反映して教職志望者も減少している。各学校が新学習

指導要領を確実に実施し教育の改善・充実に努めていくためには、教員が授業や授業準備などに集中し、教育の質を高められるようにすることが必要である。

国の動向

平成29年6月22日に文部科学大臣から「新しい時代の教育に向けた持続可能な学校指導・運営体制の構築のための学校における働き方改革に関する総合的な方策について」が諮問され、中教審「学校における働き方改革特別部会」において審議が開始された。同年8月29日に同部会から「学校における働き方改革に係る緊急提言」（①校長及び教育委員会は学校において「勤務時間」を意識した働き方を進めるこ



前 全国連合小学校長会会長
大橋 明

表1 学校における働き方改革の推進

●教員の1日当たりの学内勤務時間（持ち帰り時間は含まない。）（時間：分）

平日	小学校			中学校		
	28年度	18年度	増減	28年度	18年度	増減
校長	10:37	10:11	+0:26	10:37	10:19	+0:18
副校長・教頭	12:12	11:23	+0:49	12:06	11:45	+0:21
教諭	11:15	10:32	+0:43	11:32	11:00	+0:32
土日	小学校			中学校		
	28年度	18年度	増減	28年度	18年度	増減
校長	1:29	0:42	+0:47	1:59	0:54	+1:05
副校長・教頭	1:49	1:05	+0:44	2:06	1:12	+0:54
教諭	1:07	0:18	+0:49	3:22	1:33	+1:49

※28年度調査の「教諭」については、主幹教諭、指導教諭を含む（主幹教諭、指導教諭は、平成20年4月より制度化されたため、18年度調査では存在しない）。
 ※平成28年度の小学校教員のうち882人（12.5%）、中学校教員のうち719人（8.9%）が、土曜日・日曜日のいずれかが勤務日に該当している。
 ※18年度調査と同様に、1分未満の時間は切り捨てて表示。

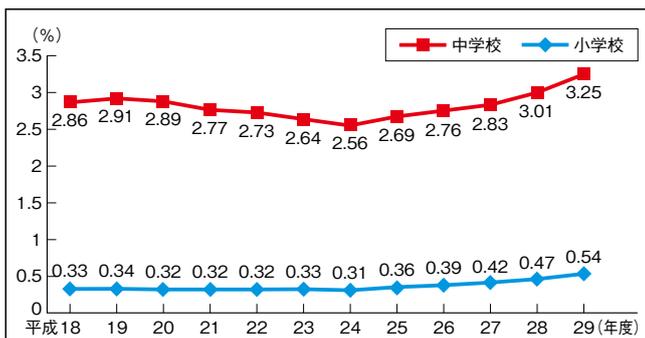


図2 不登校児童生徒の割合の推移

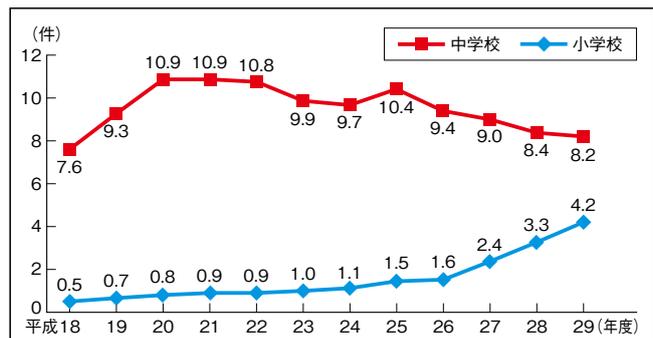


図1 管理下における暴力行為発生率（1000人当たりの発生件数）

と、②全ての教育関係者が学校・教職員の業務改善の取り組みを強く推進していくこと、③国として持続可能な勤務環境整備のための支援を充実させること）が出された。その後、いずれも

①勤務時間の管理・縮減に向けた制度の整備、②業務の明確化・適正化、③学校の組織運営体制の整備を柱とした「中間まとめ」（同年12月22日）、「学校における働き方改革に関する緊急対策」（同年12月26日文科省）、「学校における働き方改革に関する緊急対策の策定並びに学校における業務改善及び勤務時間管理などに係る取り組みの徹底について」（平成30年2月9日事務次官通知）が出された。

同年12月6日、中教審の特別部会から、勤務時間の上限に関するガイドラインとともに答申素案が示された。ガイドラインでは、「超勤4項目」以外の業務を行う時間も含めて在校する時間を「勤務時間」とし、1日の勤務時間を超えた時間の1か月の合計が45時間を超えないようにすることなどが示されている。また、答申素案では、適正な勤務時間の設定、教職員一人一人の働き方に関する意識改革、学校及び教師が担う業務の明確化・適正化、学校の組織運営体制のあり方、一年単位の變形労働時間制の導入なども含めた

勤務時間制度の改革、学校における働き方改革の実現に向けた環境整備などが記されている。今後、中教審で審議され、今年中に答申が出される予定である。

学校における業務改善

国や各自治体において学校における働き方改革が進められているが、各学校においても業務改善を推進していくことが求められる。学校における業務改善を新学習指導要領に基づく教育課程の編成と一体のものとしてとらえ、保護者や地域と共有した学校の教育目標を達成するために、一人一人の教員が意欲と能力を最大限に発揮し、十分に子どもと向き合うことができる環境をつくっていくことが大切である。

そのために、まず教員一人一人が業務改善の意義と必要性を認識することが必要である。研修会を実施して、勤務時間や給与に関わる法令についての内容を確認し、それを踏まえてこれまでの勤務の状況を振り返り、課題について共通理解を深めることが大切である。

その上で、①精選・削減、効率化できる業務はないか、②教員以外が担うことができる業務はないかという2点から、これまでの業務を見直し改善を

図る（図3）。

①精選・削減、効率化できる業務の検討…これまで慣行で実施してきたものを見直し、精選したり削減したりする。例えば、開催しなくてもよい会議はないか、会議をせずに他の方法で代替することができないか、会議を効率よく進める方法はないかという観点で検討する。また、職員室の物品を整理したり机やコピー機などの配置を工夫したりして、機能的に仕事ができる環境を作ったり、授業の指導案や教材などの管理の仕方を工夫して、その情報を共有し誰でも活用できる仕組みを作ったりすることも大切である。

②教員以外が担うことができる業務の検討…スクール・サポート・スタッフ、校務支援ボランティアなどの外部人材を活用できる業務を検討する。これらの人材の確保には学校運営協議会などの協力を得るとよいと考える。実際に運用するに当たっては、学級事務や授業準備などについて依頼する業務内容や手順・方法などについて明確にしてマニュアルを作成することや、業務を担う人材と学校側との調整を図る人材を確保することが必要である。また、経験の浅い教員が学習指導や学級事務の見直しをもって業務を依頼ができるように、管理職や経験の豊かな教

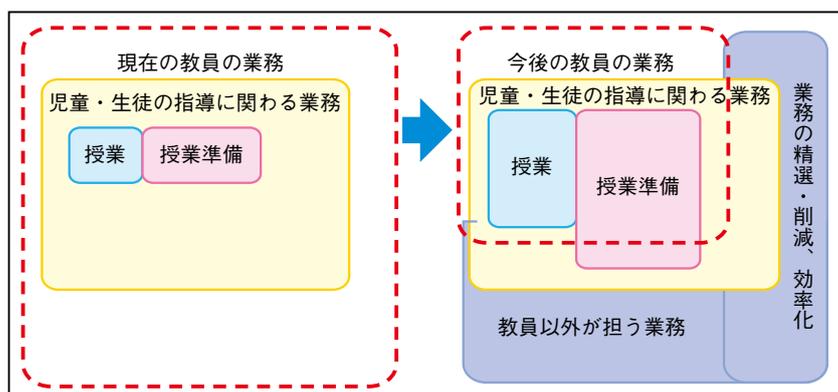


図3 業務の見直しと改善

員が週ごとの指導計画などを確認し支援することが求められる。

各学校においては教育の質を向上させることができる、持続可能な学校づくりをしていくために全教職員で知恵を出し合い、できることから業務改善を進めることが大切である。

校長として進めるべき 「学校の働き方改革」



東京都武蔵野市立第五小学校校長
嶋田 晶子

小学校として—どう持ち時間 数を軽減するのか

本部会で小学校特有の課題としてあがったことに持ち時間数があげられる。1週間28コマ程度の授業時数をどのように担任と専科で担当するかは校長が決定できることであるが各地区の基準もさまざまである。ここでの方策としては教科担任制、各地区固有の講師の活用などがある。本市では、今年度から市独自の講師制度ができ3年生以上の書写指導をお願いし、最大週5時間の専科時間をうみ出した。しかし、小学校の持ち時間については、今後さらに検討を要する事項として残された。特に、年間授業時数や教育課程のあり方の見直しは、次の学習指導要領改訂の際に、しっかりと検討し、具体的な方策を示していただきたいと思う。

行事・会議の精選を

働き方の視点から校長としてカリキュラムマネジメントを推進し、一番力が発揮できるところは行事・会議の精選であろう。職員会議の持ち方一つをとってみて

平成30年は、29年4月に発表された教員の勤務実態調査を受け、教員の働き方について社会的にも大きく注目される年となった。私は4月より中央教育審議会「学校における働き方改革特別部会」の委員として、本答申に携わらせていただいた。この経験は、さまざまな立場の方々の考えを聞くことができ、大変、勉強になった。そこで感じたことは、現場の校長としての思いを伝えていくことと働き方改革を進めることへの責任の大きさであった。私が委員として大事にしたことは、学校の働き方改革は、子どもを教え育てるとい

う教師本来の職務をしっかりと遂行できる環境を整え、授業の質の向上へ寄与できるものにしていくことであった。ここでは、本委員会で学んだことを中心に、校長として推進すべき学校の働き方改革について本校の実践も含めて述べさせていただく。

教職員の働き方に関する 意識改革を進めるために

今年度に入り、学校閉庁日や一斉退庁日の設定など考えられる取り組みを実施している学校も増えてきているが、この教員の働き方改革には、教員自身が自分の働き方を見つめ直し、勤務時間を意識した働き方を浸透させていくこと

がポイントの一つとなる。教員にはそれぞれの経験年数や職層に応じた業務があり、また経験を積むほどに仕事のやり方も決まってくる。だからこそ、新たな手立てが必要となる。校長は重点目標や学校経営方針に働き方に関する視点を入れ、方針を明確に示し、自己申告の機会などに各教員と今年度の働き方について話し合う機会をもつようにする。このことを続けることで、本校では、夕方早く帰ることを意識し、朝型に仕事のシフトを変えた教員や学年で定時に帰る曜日を決め、メリハリをつけた仕事の仕方へ変わってきた教員もいる。

も、全員で共通理解しなければならぬ。

らない事項は何なのかを明確にして会議を設定する。昨年度までと大きな変更点のないものは職員会議の時間ではなく、連絡事項として朝や夕方の打ち合わせの時に伝えるようにする。このことによりうまれた時間は、教材研究などに回せる時間となる。本校では学校評価・新年度計画を入れて年間9回の会議をとっているが、まだまだ削減することができると考えている。

次に行事の精選である。学校行事は保護者からの期待も大きく、そのため必要以上に時間をとり、準備をする傾向は否めない。これまでやってきた行事を減らすことに抵抗感をもつ場合もあるが、単に減らすのではなく、重点となるものを決め、選んで実施する。正に精選という意識を伝えることが保護者への理解も促すことにつながる。本校では、これまで2つの文化的行事を毎年実施してきた。しかし、年間の行事数の多さから学芸会と展覧会を隔年で実施することにした。このことよって一つの行事への力が集中し、内容面としても充実したものと変えてい

くことができた。

校長は保護者・地域への周知と理解の推進役

学校の働き方改革を進める上で、保護者への周知と理解を進めることは非常に重要である。個人面談などで勤務時間外の時間を指定してくる、夜7時以降に電話をかけてくるなど学校はいつでも対応して当たり前という意識が強く、そのことが教員の強いストレスになってしまっている事例も多い。本市では、教育委員会に昨年10月より電話のオートメッセージを各校に導入していただいた。午後6時30分～午前7時30分までは電話に出なくていいというシステムは、教員に夜間の電話対応をしなくてもよいという安心感につながり、自分の業務に集中できる環境となった。ここで大切なことは、校長は職務として新しい試みについて保護者への周知と理解を進める推進役になることである。例えばオートメッセージは、相談を受け付けられないのではなく、よりよい授業づくりに集中する環境をつくることであることを伝えてきた。プリントを配布するだけでなく、

く、試行の何か月も前から導入の理由、方針や概要を保護者会やPTAの運営委員会などで何回も伝え、懸念される課題への対応を丁寧に行うことが教員の働き方への理解を得ることにつながる。

教育委員会と一体となって進める工夫

学校の働き方改革を進めるさまざまな手立てを考える時、一人の校長だけでは進められない内容がある。ICT環境やエアコン、印刷機などの施設設備もその一例である。今年度、本校には印刷用の複合機が試験的に導入された。1分間に100枚以上のカラー印刷が職員室でできる仕事環境は、効率的な業務が進むことを多くの教員が実感するものであった。また、校務システムの全国全校への導入は喫緊の課題である。学習指導要領全面实施を控え、評価のあり方も変わる。通知表、指導要録の作成にかかわる業務量は校務システム導入の有無で全く違うものとなってくる。

また、職員のストレスチェックも同様である。50人以上の職場に義務づけられたストレスチェックが産

業医の選任義務がない規模の学校に関しては教育委員会がその区市町村を一つの事業所とみてストレスチェックを実施するように働きかけていくことも重要である。

まとめ

現在の状況を鑑みると残念ながら学校の働き方改革に特効薬はないと言えるだろう。時間外勤務の上限として出されたガイドラインを有効性のあるものとしていくため、校長に課された使命は大きい。一方、文部科学省はこれまでより実施期間を短縮し、3年後の2022年に再度、勤務実態調査を実施する予定をしており本部会で提案されたさまざまな取り組みの成果と課題が明らかになる。今後は、次回の調査結果を踏まえ、より大胆な改革案の提案を校長として期待するところである。

市より「学校教育情報化推進モデル校」の指定を受け、ICTの積極的な活用など、未来を生きる子どもたちの情報活用能力を育成する授業研究を行った。29年度には、5年生の「正多角形と円」の単元で、29年3月公布の学習指導要領で新たに加わったプログラミング学習について先行研究を行った。今年度は、11月9日（金）に、JAET（全日本教育工学研究協議会）全国大会・川崎大会の授業研究校として、市内の4小・中・高等学校、特別支援学校とともに研究授業を公開した。

今年度の研究では、川崎市の「川崎市版 情報活用能力チェックリスト2017」を使い、全校でアンケート調査を行った。その結果を受けて特に、情報活用の資質・能力のなかでも「思考力・判断力・表現力等」を育てることに着目した。次期学習指導要領では、情報活用能力を教科の中で育成する方法と、総合的な学習の中で育成する方法とをあげているが、本校では教科での実現を目指した。

昨年度まで行った研究では、「問いをつかみ、自分で考え、意見を交流して考えを深める」問題解決的な学習過程を経ることが、教科のねらいの達成に有効であることが確かめられていたので、その過程を用いてさらに情報活用能力をつけることを目指した。

情報活用能力を各学年のさまざまな単元で意識的に育成するため、学習指導要領から情報活用能力に関わる部分を抜き出し、各学年の単元などを整理して「情報活用能力・学年段階表」を作成した。そして、11月9日の授業公開では、全クラスで表中に位置付けられた単元の授業を行った。その中では、昨年度の研究を踏まえて5年の算数「正多角形と円」で扱う、PC画面上で行うプログラミング学



▲ 5年道徳「礼儀とは」～チャット機能を使った情報モラル教育～

習と、6年の算数「比」の学習で実際にロボットを動かすプログラミング学習を公開し、多くの参加者の関心を集めた。また、新しく教科となる英語でタブレットPCを活用した授業や、タブレットPC上の複数のデータを活用して考える社会科授業など提案型の授業も公開した。PC教室での仮想チャット機能を利用した情報モラルの授業では、児童に同じ体験をさせることで話し合いの土台づくりができ、課題の意図をつかませることができた。多数の児童の考えを画面上で共有できるソフトウェアを用いた国語の授業では、児童の思考の速さについていけるタイピング能力の高さも話題となっていた。特別支援級では、店員の役割をする自分たちの姿をタブレットPCで撮影し、モニターで確認する授業を行った。児童が電子黒板の機能を自在に利用し、自らの考えを説明する算数の授業や、プリンターを使って児童の考えをすぐに見やすい形で板書に生かす授業など、教科のねらいを達成する授業の中で、情報活用能力も身につける授業を提案することができた。



▲ 4年社会「わたしたちの神奈川県」～タブレットPCで複数資料を比較～



▲ 6年国語「鳥獣戯画を読む」～テキストの一覧画面を用いた意見交流～

先の読めない時代を生きる力をつける

川崎市では、平成30年11月9日(金)・10日(土)、全日本教育工学研究協議会全国大会川崎大会が行われた。旭町小学校も他の4つの小・中・高等学校、特別支援学校とともに、会場校として研究授業を公開した。

1年半余りの研究の成果として、情報活用能力・学年段階表を示し、教科の学習の中で情報活用能力も育てることを目指した授業を全クラスで行った。



神奈川県 川崎市立旭町小学校

歴史ある学校と長い伝統

旭町小学校は、2014年に創立九十周年を迎えた歴史ある学校だ。全校児童数は、497人。17学級であるが、学区内の大型住居建設により年々増加しており、数年以内に700人を超える見込みである。歴史は古いが、校舎は2013年に鉄筋コンクリート3階建ての耐震新築校舎に建て替えられたばかりで、木のぬくもりもあるうえ、快適な教育環境である。学校目標は、旭町小学校の子を意味する「あさひこ」の文字を折句として、以下のようにたてられている。

- あ 明るく元気な子
- さ 最後までがんばる子
- ひ 人のためにつくす子
- こ 心やさしい子

「健康で安全な生活習慣を身につけ、強い意志を持ち、勤労、奉仕に喜びをもって参加し、他の人を認めて温かく接する、これからの時代を生きる力を持った子どもたち」を育てることを目指して、日々教育活動を続けている。

本校の特色となっている「あさひこ班」活動は、

40年近く積み重ねられてきた地域縦割り班の教育実践である。全校児童を15の縦割り地域グループに分け、異年齢の子どもたちが月2回金曜日に一緒に遊んだり、地域の方に手紙を届けたり、学校行事に取り組んだりしている。このあさひこ班は、緊急時には集団下校のグループにもなっている。大人になっても同じ地域に住む一員として、助け合って安全に暮らし、協力してお互いを尊重しあう地域づくりの礎を育てる実践である。

積み重ねてきた校内研究

平成30年度 校内研究テーマ

問いをつかみ じっくり考え 豊かにつなげる子
～みんなと一緒に情報を活用して

学習すると楽しいね～

本校では、主に算数科を中心として校内研究を積み重ねてきた。平成28年度の秋には、神奈川県数学教育研究会連合会で算数科の授業公開校としても実践を重ね、授業の中で子どもたちの考えをつなげていくことを大切にしてきた。29年度からは川崎



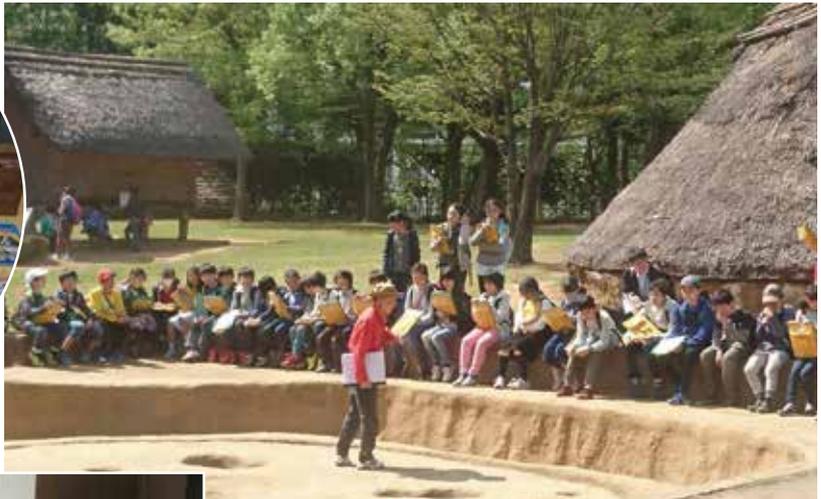
▲5年算数「正多角形と円」～PCソフトウェアを用いたプログラミング～



▲6年算数「比を使って考えよう」～プログラミングを用いたロボット操作～



●常設展示室ちょっと昔の暮らしコーナー



●大塚遺跡を見学する6年生



●常設展示室を見学する3年生



●常設展示室を解説する解説ボランティア

(公財)横浜市ふるさと歴史財団の博物館 博物館でまなぶ子どもたち

(公財)横浜市ふるさと歴史財団では、原始・古代から近現代まですべての時代の横浜の歴史をまなぶことができる施設を管理運営しており、各施設で横浜市内の小学校を対象とした見学プログラムを実施している。ここでは横浜市歴史博物館(都筑区)と横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館(中区)を例として、博物館と小学校とをつなぐ取り組みについて紹介したい。

横浜市歴史博物館を訪れる子どもたち

横浜市北部の都筑区にある横浜市歴史博物館(以下歴博)には、4月の始業式が終わると小学6年生が多く訪れる。6年生はこの時期に歴史の学習を始めるが、その学習と遠足を兼ねた来館である。見学は歴博の常設展示室に加え、隣接する大塚・歳勝土遺跡(国史跡)公園である。この遺跡は弥生時代の集落とお墓の跡で、当時の住居などが復元されている。6年生をガイドするのは、歴博の展示解説ボランティア。

4月から5月にかけては一日10校近く訪れる日もあり、ボランティアはこの間に約300校の児童に原始時代の魅力を伝える。

11月から2月の寒い時期には3年生が「昔の生活・暮らし」をまなぶために来館する。歴博では常設展

示室の一角に昭和30〜40年代の暮らしのコーナーを設け、校長OBのエデュケーターが解説する。児童の親世代も経験したことのない昭和の暮らしに、子どもたちは興味津々である。合わせて遺跡公園に移築された江戸時代の古民家(都筑民家園)の見学も行う。こちらのガイドは先の解説ボランティア。「敷居は踏んじゃいけないよ」と声をかけながら、子どもたちを江戸時代の居住空間に招き入れていく。

吉田新田から始まる都市発展をまなぶ

横浜港にほど近い中区日本大通の横浜都市発展記念館・横浜ユーラシア文化館では、小学4年生向けに解説つきの団体見学を受け入れており、5月下旬から3月上旬にかけて年間100校を超える小学校が来館する。



●もっこ体験

●4年生の吉田新田学習



子どもたちへの解説は両館学芸員と上記エデュケーターが担当し、4年生が学習する江戸時代の「吉田新田の開発」をテーマに45分程度のプログラムを実施している。横浜開港か



●ユーラシア文化館常設展示

ら現在にいたる都市発展の礎となった場所に両館が建っており、その歴史の現場に来ていることを子どもたちに伝えるために、パネルを使った解説や中庭での「もっこ担ぎ」体験を加えて、博物館から外に出て、と子どもたちに伝えるために、パネルを使った解説や中庭での「もっこ担ぎ」体験に加えて、博物館から外に出て、400年前の江戸時代

海が広がっていたことを実感できる場所へと案内している。またユーラシア文化館の常設展示室では、小学2年生が学習するモングルの民話「スーホの白い馬」の世界を再現したコーナー「スーホの部屋へようこそ！」を設けて、移動式住居（ゲル）で使われる家具・楽器「馬頭琴」・民族衣装を展示している。



●日本大通りでの解説

全国各地のさまざまな取り組みを紹介します。

太田市立^{いくしな}生品小学校は、群馬県太田市の西部の旧新田町に位置し、鎌倉攻めで有名な武将新田義貞ゆかりの生品神社を校区に有する、歴史と伝統のある学校です。

そんな本校には、『希（のぞみ）～光の中を歩んだ姉弟～』という本校独自の道徳の本（教材）があります。追求する内容項目は「生命の尊さ」です。

この教材が生まれた背景には、平成26年度に起こった大変悲しい出来事があります。当時4年生だった大河原歩希さんと、2年生だった大河原光希くんのとても仲のよい幼い姉弟が、相次いで天国へと旅立ってしまったのです。二人は、どんなに体調が悪くても、酸素ボンベが手放さずチューブが巻き付いているからだであっても、友だちのことを気遣い、困っている人を助けようとするお子さんでした。また、同

じクラスの子どもたちをはじめ、学年そして全校の子どもたちも、二人のことを思い、助け合って学校生活を送っていました。次第に体力も付き、回復に向け順調であった最中、お姉ちゃんの歩希さんが突然体調を崩し入院することになり、それに合わせるように、弟の光希くんも体調を崩してしまいました。学校では、千羽鶴を折ったり、ビデオレターを作ったり、みんなで応援する毎日でした。しかし、懸命な治療の甲斐もなく、二人の小さな命の灯は消えてしまいました。

深い悲しみの中にあっただご両親様からは、二人が楽しく過ごした生品小学校のために、二人を応援してくれた生品小学校の子どもたちのために、何か恩返しをしたいというご厚意がありました。そこで、ご両親様と学校の職員で力を合わせて、二人が生きた軌跡をもとに、今を生きる子どもたちに「命」の大切さについて考えてもらおうと、道徳の教材を作成しました。それが二人の名前からとった『希～光の中を歩んだ姉弟～』です。

本校では、この教材を用いて学年ごとに子どもたちの発達に合わせて授業の展開を考え、「命の授業」を道徳の時間に全クラスで行っています。ご両親様には、ゲストティーチャーとして参加していただき、子どもたちや保護者に対して、命の大切さや、親の子どもへの思い、子どもの親への思いについて生の声を届けています。今では、この取り組みは本校以外にも広まりつつあります。授業中の子どもたちは、みんな真剣な表情で話を聞き、自分だったらどうするか、どう思うかを真剣に考えています。

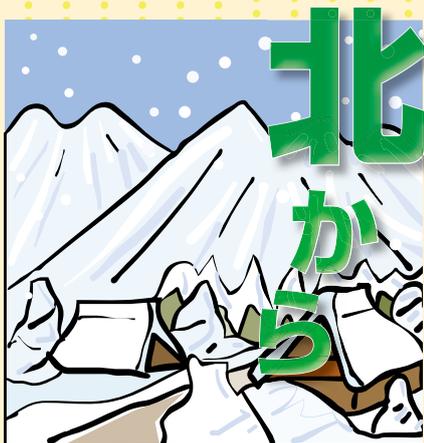
折しも平成27年3月の学校教育法施行規則の改正により「特別の教科である道徳」がスタートしました。この「命の授業」は、自らの生き方を育むための、児童一人一人が自分自身の問題と捉え向き合う「考える道徳」「議論する道徳」そのものです。

姉弟の悲しい出来事を無駄にしないためにも、ご両親様のご厚意に応えるためにも、生品小学校ではこの「命の授業」を引継ぎ、更なる充実を図りながら、「自他の生命を大切にし、命ある今を精一杯生きる」子どもを育成すべく、実践を積み重ねたいと思います。

群馬

独自教材『希（のぞみ）』を使った「命の授業」への取り組み

太田市立生品小学校 校長 堀江 雅彦



教材の問い合わせは、当時の同小学校長の土屋修・東京福祉大学教授 0270-40-3207（土屋研究室直通）へ。1部500円。



生品小のシンボル すずかけの木

宮 城

先生方、歌いましょう！

岩沼市立岩沼小学校 校長 佐藤 崇

私は、平成30年度をもって定年退職をすることになりました。教職38年間、私は、音楽を研究の中心に据えてきました。モットーは「楽しく、しかも能力が育つ授業」。楽しさと身に付けた技能があってこそ、音楽の本質に触れる喜びを味わうことができるのです。

音楽ですが、何と言っても先生自身が音楽を楽しんでいないと、子どもたちに音楽の楽しさは、伝わらないでしょう。

そこで取り組んできたのが、教職員による合唱です。音楽を楽しんでいる姿をじかに子どもたちに伝えるのです。宮教大附属小、浅水小、富谷小、賀美石小、最後の勤務校の岩沼小と、教職員合唱を歌い続けてきました。

そして、教職最後の職員合唱曲として選んだのが、「手紙～拝啓十五の君へ～」。なくならないじめ、死に急ぐ子供たち・・・悲しい現実があります。「手紙」には、今を生きる子どもたちに、伝えたいメッセージが込められています。

私は、これまで3人の教え子を亡くしました。1人は震災、2人は大人になってからの自殺です。教師にとって一番の悲しみは、教え子に先立たれることです。「担任より先に死ぬな」、「生きてさえいれば何とかなる」。その思いを「手紙」を通して伝えたいと考えました。

「手紙」は、さまざまな合唱団等で歌われています。でも、一番心を打つ演奏は、自分自身も思春期を過ごし、心が揺れ動いている子ども

たちと共にいる教職員の合唱だと思っています。

10月、子どもたちと保護者、地域の皆様に「手紙」を聴いていただきました。保護者の感想を紹介します。「校長先生のスピーチからの合唱、ホロッと涙がこぼれました。先生方の歌う『手紙』、心を打ちました」。

私たちの「思い」を、しっかり受け止めてもらえたようです。先生方、歌いましょう！



合唱の演奏ファイルはクラウドで共有してあり演奏を聞くことができます。
<https://youtu.be/LTcRoYLnIw8>



兵 庫

「俳句で育む国語の力」

公益財団法人柿衛文庫 学芸員 加藤 有果子

柿衛文庫では、郷土伊丹の俳人上島鬼貫の顕彰事業の一環として、平成3年より「鬼貫顕彰俳句 小学校・中学校・高等学校の部」と銘打ち、俳句を募集しています。

江戸時代、伊丹は俳句作りがたいへん盛んで、多くの俳人を生み出しました。なかでも鬼貫は、幼少の頃から俳句に親しみ、芭蕉とならぶ俳人として知られています。柿衛文庫の創始者である俳文学者の岡田利兵衛（柿衛は号）は、この優れた郷土の先輩である鬼貫を大いに顕彰しました。これをふまえ、鬼貫と同じ伊丹の街に暮らす子どもたちにも俳句作りに挑戦し、17音のリズムに親しんでもらいたいという思いから、この事業に取り組んでいます。

毎年、伊丹市ならびに伊丹市教育委員会のご協力のもと、市内の小中学校・高等学校を中心に募集を呼びかけ、2万句近いご応募をいただいています。その中から、小学校低学年（1年生～3年生）の部・小学校高学年（4年生～6年生）の部・中学校の部・高等学校の部の4部門において、鬼貫賞が各1句・佳作が各10句選出され、入選作として各部門20～50句程度が選ばれます。また、選考は予選と本選の2回行い、本選では俳人の坪内稔典氏を中心に、伊丹市内の小中学校の国語担当教諭にご協力をいただいています。

平成18年度から「『読む・書く・話す・聞く』ことば文化都市伊丹特区」の指定を受けて、伊

丹市独自の教科「ことば科」が誕生し、言葉に対する意識が高い伊丹の街の子どもたちに、世界で一番短い詩として海外でも注目されている俳句を通じて、言葉の魅力や表現することの楽しさを体感してもらえる機会として、今後も力を注いで参ります。



第28回鬼貫顕彰俳句表彰式（於 伊丹アイフォニックホール）

地球となかよし メッセージ

「こうしたい」という提言や主張を込めた作品が目立ちました。「命」「プラスチックと海」などに着目した作品が増え、環境汚染に胸を痛め、自然保護を訴える作品が特徴的でした。海外からの作品も多くなり、人と人との争いや差別などに直面し、考え込むすがたが印象的でした。 評：審査委員長 児島邦宏

入賞作品発表

◎協賛／日本環境教育学会 ◎後援／環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

学校賞：東京都 世田谷区立下北沢小学校

団体賞：愛知県 ふれあいスクール「タッチ」

守りたいこの地球 地球となかよし大賞

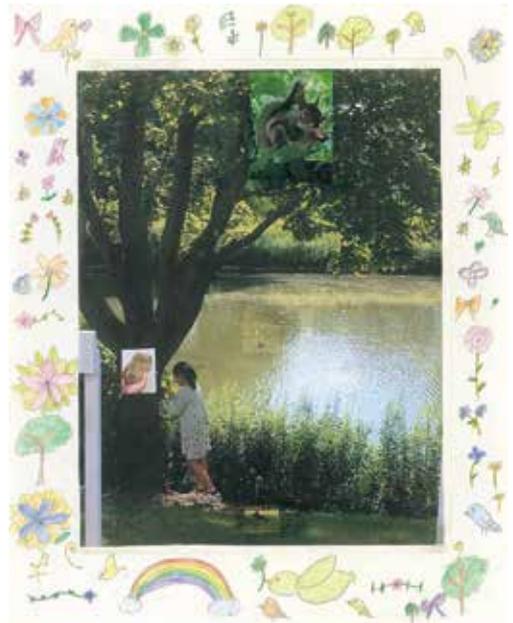
川濱 愛梨 海外 シカゴ双葉会日本語学校 5年

私の家の庭には大きな木と池があります。庭にはりす、うさぎが、池には水鳥がやってきます。緑がたくさんで生き物が来てくれるこの家が大好きです。この前、3億年ほど前の化石がとれるメゾンクリークへ行ってきました。木の化石や巣あなの化石などが見つかりました。

「あなたが木だった時代はどうだった？」そう思いながら、とってきた化石をそっとうちの木とくっつけてみました。「こんにちは」「こんにちは、あなたは犬先ばいですね！」そんなお話が聞こえてきそうでした。どうかこのままの地球でいてほしいです。

今年は、世界的に暑い夏でした。もう先のばしにはできません。子どもも大人もいっしょにかんきょうを守る行動が必要だと思います。

評 3億年の木と木との出会い。このことが、3億年後にも持続されねばなりません。それを継承し、守るのが、今の私たちの使命です。



四季のある日本

窪 柚希 東京都 日野市立夢が丘小学校 4年



私たちが住んでいる地球。その中でも、私が住んでいる日本には、春夏秋冬という四季があります。その事により、旬の食べ物や、その時期にしか見られない動物や植物がたくさんあります。そして、夏は暑く、冬は寒いといった特ちょうもあります。

しかし最近では、地球温暖化により、少しずつ季節がくるっているように感じます。

これから先も、地球に住みつづける私たちが、四季を感じながら生きていくには、地球をよこさず、動物や植物を大切にしていかなければなりません。ポスターをかいたことにより、あらためて気づくことができました。

評 春夏秋冬。四つに区分された何とビジュアルな世界でしょう。この四つの画面がずれ、ゆがんでしまったら…。今を守らねば！

◎審査委員(敬称略)

児島 邦宏 東京学芸大学名誉教授 角屋 重樹 日本体育大学教授 田代 浩一 環境省環境教育推進室室長補佐 戸澤 美佐 毎日新聞社教育事業グループ教育事業担当部長
中村 和彦 日本環境教育学会理事・事務局長、東京大学大学院農学生命科学研究科特任助教 野澤 由美 全国小中学校環境教育研究会会長、東京都府中市立武蔵台小学校校長
伊東 千尋 教育出版 代表取締役社長 小島 正利 教育出版 取締役専務執行役員編集局長

小さな命

岡本 莉亜 海外 メルボルン日本人学校 4年



夏の暑い日に、わたしの家に黄緑色の見たこともない美しいセミが飛んで来ました。ふだんは見られない生き物が見られてラッキーだと思いました。

わたしの手のひらにあるのは数センチの小さな命です。地面で働くアリだって、6トンもあるゾウだってみんな同じ命をもっています。

セミのような虫は何年も土の中において、すがたを見せません。成虫になってからの一週間だけ羽を広げて自由に飛ぶことができるのです。このセミはたった一週間しかじゅ命がのこっていないのに、わたしに会いに来てくれたんだと思っています。わたしに何か伝えたいのかな? 「ありがとう大切な命を見せてくれて。ずっとわすれないよ。」

評 このセミの眼。安心しきった前足。一瞬の命の輝きと尊さが感じられます。命の出会いの喜びと大切さがあふれています。



ときの親子

本間 歩奈 千葉県 市川市立宮久保小学校 2年

わたしは、まい年おじいちゃんのスんでいたいえがあるさどへ、おはかまいりにいっています。さどにはときと言うとりがいるのですが、日本のときはもういなくなってしまい、いまいるのは中国からいただいたのをそだてて、ふやしているのです。

このときは、ときこうえんでほごされているときの親子で、今年の春にたまごからかえり、今は、お父さんやお母さんよりも大きくなりました。水の中のどじょうをさがしてたべしているところをかきました。

わたしたちは、ちぎゅうももどうぶつもみんななかよくたすけあって生きていきたいなあとと思います。

評 ときの家族の楽しげな食事。いちどはいなくなったときが、またふえてきました。いつまでも、この風景をつづけていきたい。

教えてくれる線路

佐藤 一輝 海外 ウィーン日本人学校 6年



偏見・・・根きよがないのに決めつけたりすること
差別・・・あるものを正当な理由なく他よりも低くあつかうこと
ねたみ・・・他人をうらやましく思ってにくむこと
無関心・・・気かけない、興味を示さないこと
4つの悪い気持ちに負けた人がこの毒ガス行きの線路をつくった
いつかこの世界の全ての生き物が生きることが幸せと思えるように
ぼくは4つの悪い気持ちに負けない

評 生きることの幸せと偏見、差別、ねたみ、無関心は、鉄路の両端にある。その両者の緊張感をいだきつつ、「負けない」自覚が心強い。



人間がふく 命のしゃぼん玉

松岡 花 東京都 世田谷区立下北沢小学校 4年

世の中には、一秒にいくつもの新しい命が生まれてきています。そのいっぽうで、一秒にいくつもの命が消えていきます。中には小さな命のままなくなってしまう命もあります。いろんな理由で消えていく命。

「生まれた時から病気だから。」「かいぬしが見つからないから。」「しょうがないから。」

人間がそんな理由で命をうばってもいいのでしょうか。生き物の命がなくなるしゅんかんは、しゃぼん玉のようです。すこしずつまわりがみえなくなり、やがて、しゃぼん玉がはじけるように「パツ」と命が消える。私はそんなふうにならなうしました。

生き物の命をうばうというのは、しゃぼん玉をふくのと同じことだと思います。なのでこの絵をかきました。私はだれにも、命のしゃぼん玉をふいてほしくないと思います。

評 たしかに命は、しゃぼん玉のようにはかなくてこわれやすいもの。それだけに、もっと命をやさしく、大切にしなければなりません。

いつまでも美しい
くじゃくの羽が続くように



阿知波 昊 愛知県 知多市立八幡中学校 1年



僕は生き物が好きです。くじゃくのような美しい羽をもつ生き物たちが、これからずっと元気ですごしていけるようにと願いをこめて、有松絞りの残り糸で美しい羽を表しました。

美しい花火



小山田 姫己 愛知県 知多市立旭南中学校 2年



毎年、近くの公園で花火大会が行われます。日本の夏の風物詩である美しい花火を、いつまでもみんなで楽しむことができるよう思いを込めて作りました。

入選作品

どうどうと生きる

佐藤 まてか 海外 香港日本人学校香港校 4年



朝起きたら、結膜下出血になっていました。それは、白目が真っ赤になるものです。その目で外を歩くと、周りの人にジロジロ見られてとても嫌な気分になりました。時には下を向いて人に見られないようにしていました。

そうしたらお母さんが、「どうどうとしてなさい、あなたは美人なんだから！」と言ってくれましたが、なかなかどうどうと出来ませんでした。

私も街で変わった人を見ると、ジロジロ見ていた事を思い出しました。自分が見られる立場になり、初めて人の気持ちが変わりました。学校で多様性について習いました。世界には色々な人がいる。見た目や自分と異なる部分がある人を差別してはいけない。自分も周りの目を気にする事なく、どうどうと自信をもって生きて行きたいです。

イスラーム文化にふれて



板倉 宗汰 東京都 世田谷区立下北沢小学校 4年



「アッサラーム アライクム」これはイスラームの人々のあいさつです。「あなたに平和がありますように。」という意味です。

ぼくは、東京ジャーミイというイスラーム教のモスクに行きました。おいのりをするとところは天井が高く、丸くて白いかべに赤や青、金色でもようや文字が書いてありました。ステンドグラスなどもあってとてもきれいでした。女の人は頭にぬのをまいていました。おいのりが始まる時、歌がひびいてぼくはふしぎな気持ちになりました。

イスラーム文化については、はじめて知ったことと知らないことがあるけれど、世界にはいろいろな宗教があって、おねがいする気持ちはみんないっしょだとわかりました。

入選作品

自分だけの落ち枝鉛筆

小島 優作 東京都 日野市立夢が丘小学校 4年



僕は家で勉強をします。勉強には鉛筆が欠かせません。鉛筆の材料は木材です。鉛筆は短くなるとほとんどの家で捨ててしまう場合が多いです。僕は勉強すればするほど木が伐採されるか心配です。そこで鉛筆のことに調べて、エコ鉛筆の存在を知りました。

エコ鉛筆は、短くなった鉛筆の芯を取り出し、落ち枝に入れて長くする鉛筆のことで。僕は実際に作ることにしました。鉛筆から芯を取り出す、いいサイズに切る、穴を開ける工程で約4日間もかかりました。芯がなくなるまで使えるため、作る時間より長く使うことが出来ます。

一人一人が知って意識することで、地球との関わりは変わると思っています。

一人一人が知って意識することで、地球との関わりは変わると思っています。

入選作品

あわおどり

戸村 麻奈未 徳島県 勝浦町立生比奈小学校 2年

わたしは、やっこれんというれんであわおどりをおどっています。やっこれんには、アラスカしゅっしのローズリー先生もいっしょにいます。四月にはたいわんからたくさんの方が、わたしたちのおどりをみにきてくれました。みんなすごくよろこんでくれました。

わたしは、あわおどりが大スキです。これからもあわおどりをたくさんおどって、たくさんの方の人にみてもらいたいです。みんなでおどって、しあわせな気持ちになりたいです。



入選作品

ツバメのようにはいかない

渡邊 珠子 東京都 日野市立夢が丘小学校 6年



私は今年の春、町中でツバメの巣を見つけました。とても人の多いところに適し、ひなを巣立たせるツバメがすごいと思いました。しかし、ツバメのように町

になじむことのできない動物もいます。そういった動物は、山や森で生活しています。

ところが最近、森や山はどんどんきり拓かれて、そういった動物のすみ所は減ってきています。

私は、これ以上このような動物が減ってしまわないために、森をきり拓くのをやめ、木をうえ、かれらのすみ所をふやさないといいなと思います。

入選作品

人間と海の生き物たち

イーガン 愛理 海外 香港日本人学校香港校 5年



最近、人々が海にゴミをすてて、海の生き物に悪いいきょうを与えています。

例えば、海ガメの鼻の中にストローが入ったり、魚がビニール袋を食べたりしている

のです。人々が捨てるビニール袋が自然にもどるには実は、450年かかります。そしてそれは、我々人間のせいです。でもこのままでは、美しい自然がなくなり海の生き物が絶滅してしまうでしょう。

魚たちは、そのような、はかいされた自然で生きるしかないのです。だから、私たち一人一人が心がけ、海をきれいにし、魚たちが喜んでする自然を残したいと思います。

入選作品

わくわく、どきどき 世界に友達の輪を広げよう!!

手代木 幸 新潟県 新潟市立上所小学校 6年



私は、新潟市国際交流推進事業の訪問団の一員として、韓国ウルサン市に行きました。舞龍小学校では、私たちが新潟甚句を踊りました。途中から大勢の韓国の友達が輪の中に入り、踊り終わった後もさっきの「ありゃさー」教えてとたのまれました。こんなに喜んでもらえるとは思わなかったの、とても楽しかったです。

言葉はわからなくても、わかり合おうとする気持ちがあれば、思っていることは伝わりました。言葉ではなく気持ちが大切だと感じました。今年は国際理解委員会に入りました。さまざまな国の人達と友達になりたいです。

入選作品

北斗七星

高村 百合子 静岡県 御殿場市立御殿場中学校 1年

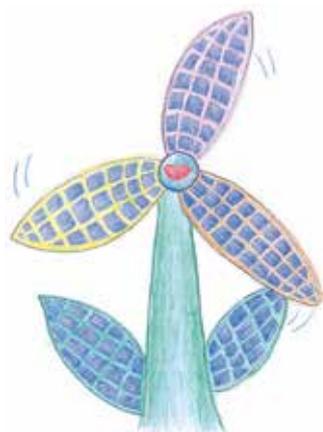


北斗七星は、空全体を「凜」とさせるオーラがある。「ここが居場所なのよ。」と輝き続け、人間の信頼を得ている。私も自分が輝ける場所を作るために、毎日努力し続けている。

入選作品

地球を救う花

鳥巢 美心 海外 中部テネシー日本語補習校 中学3年



この地球を救う花は、まずお花なので二酸化炭素を吸って、酸素を出します。それに葉と花びらは太陽光パネルになっているので、発電も出来ます。さらに花びらの部分が風で回って、風力発電も出来る花です。みんなが大好きな自然と地球が私達の何代も先の未来でも、愛され続けるように、こんなお花が地球中にたくさん色鮮やかに咲くといいと思いました。

入選作品

未来まで育てていく花

岡本 陽向 愛知県 知多市立知多中学校 2年



私は、花を育てることは人の心をいやしていくことだと思っています。人は心がいやされると、やさしい気持ちになり、周りの人にもおだやかに接することができます。そんな素敵な未来につながる花を、日本の伝統工芸である有松絞りの残り糸を使って表現しました。

自分の目と頭を使って、 樹木のそっくりさんを発見

珍樹ハンター 小山直彦（第一回）

能動的に楽しめる自然の遊び

樹木が、動物の姿や人間の顔などに見えたことはありませんか？ 私はそんな変わった樹木を探す「珍樹ハンター」です。主に幹や枝に現れるおもしろい模様や形を自由な発想で何かに見立て、それに名前をつけて珍しい樹木（珍樹）に仕立てる活動をしています。この自分の目（観察力）と頭（想像力・記憶力）の力を使って樹木の中に「そっくりさん」を発見する「珍樹探し」は、現在、子どもたちを取り巻く環境として、インターネットやゲーム、テレビなど受動的なものが多いなか、外に出て能動的に遊べるのがポイントです。

また遊びには正解（あるいは決め事）のある遊びと、それが無い遊びがありますが、珍樹探しは後者です。答えやルールばかり



ひらがなの「て」
(クスノキ, 小金井公園)



人差し指
(ラクウショウ, 新宿御苑)



ウミガメ (マテバシイ, 亀戸中央公園)

求められる現代社会において、この遊びは子どもの内側にある創造力の種を芽生えさせるきっかけとなり、自然の中で個性的に頭と心を働かせながら楽しむため、情操教育にもぴったりです。

子どもの頃の見立て遊びを再現

珍樹探しをする私を「変わり者」「暇人」などと揶揄する大人がいます(笑)。しかし、大人になるにつれ、忙しさの余り昔の感覚を忘れてしまっただけで、子どもの頃はみな同じことをしていたはず。青空にぽつぽつと浮かぶ雲や、河原に転がる石ころなどを何かに見立てて遊んだことは誰でも一度はあるでしょう。見立ての対象が樹木中心だっただけで、私もそうでした。小学校からの帰り道、公園などで樹木を眺め、大人の目には見えないファンタジーな世界を感じていました。今から約13年前、会社を辞めて仕事一筋の日々から解放されました。すると心にゆとりが生まれ、少年のような気持ちがよみがえり、再び見立て遊びをする大人になったのです。改めて、子どもの頃に体験して得た感覚は大切なことであり、自然に身につけているものだと実感しました。

樹木のことを学びきっかけに

小学生に体験させたくて、自治体や公園の協力を得て夏休みなどに珍樹探しのイベントを行います。そんななか、子どもたちにも「樹木って生きてるの？」と聞かれることがあります。これには驚きました。樹木が生き物かわからないとは、地球温暖化対策の話どころではありません。珍樹探しをする、人間の顔や姿が一人一人異なるように、同じ種類の樹木でも表情が一本一本違うことがわかります。また、実際自分で見つけると愛着が生まれ、安否確認や再会したい気持ちが生まれます。珍樹探しを通して、樹木の成長や生死を感じ取り、樹木を大切に心が芽生えるわけです。自然観察の魅力は人工物とは違い、生命力や、二つとして同じ形がない不思議さを感じられることです。とくに樹木は成長や環境による変化が大きいため、観察がよりいっそうおもしろい。珍樹探しは、近くの公園や街路、校庭など、樹木のある場所なら今すぐタダで始められる身近な自然の遊びです。この機会に、ぜひ一度。

小山直彦（こやま なおひこ）

1965年、東京都生まれ。公園や森などで珍しい樹木を探す「珍樹ハンター」。樹木を何かに見立てる「珍樹探し」を、新しい自然の遊びとして提案し続ける。著書「珍樹図鑑」(文春新書)。これまでに「珍樹アニマル探偵団」「樹木のそっくりさんフォトコンテスト」などイベントを多数開催。ウェブサイトは「珍樹の森コレクション」で検索。

小学校英語の新段階



岐阜女子大学・大学院
学長 松川 禮子

小学校英語は英語教育改革のいわば切り札として、「総合的な学習の時間」での英会話、必修外国語活動など10年ごとに段階を経ながら徐々に導入されてきたが、2020年、新たな段階を迎える。中学年での外国語活動導入と高学年での教科「外国語」の開始である。

これによって、授業時数の上では3倍という量的拡大になり、より多くの小学校の先生が関わることになる。特に高学年は週2コマになり増加の1コマ分について、現実にはALTの増員や、モジュール学習を取り入れるなどのカリキュラム編成上の課題もあがっている。

小学校英語教育における新段階の意味は、大きく3点あると考えている。1点目は、これまでの継続としての音声による意味あるコミュニケーション活動である。これまで小学校外国語活動で大事にしてきたのは、単なる英会話ではなくて、伝え合う内容を重視した言語活動であった。子どもの興味・関心を大切に、真に「聞きたい、話したい」必然性のあるコミュニケーション活動を行ってきた。そのことがコミュニケーション能力の素地を作ることに繋がると考えられてきた。コミュニケーションでは伝え合う内容が大切だということは、教科化される今後も変わらない。

2点目は、丁寧な文字への導入である。従来、中学校英語科では、文字の読み書きの指導は、入門期の短期間で行われてきた。これまでの小学校外国語活動でも文字は扱われていたが音声中心の学習だったため、文字学習へのスムーズな接続に課題があった。



今回それをまず中学年では、日常多くのアルファベットの字に囲まれていることに気付くことから始め、文字への興味・関心を高める。そして大文字、小文字を識別し、慣れ親しむ活動を十分行う。高学年の「読むこと」の目標は①文字の名前を発音できることと、②音声で十分慣れ親しんだ語句や表現を推測して読み、意味が分かることである。発音と綴りを関連付けて指導することは中学校での指導事項だが、②ができるためには、音声と文字との関係を意識させる指導も行う。「書くこと」の目標は、①大文字、小文字を活字体で書くこと、②語順を意識しながら音声で十分慣れ親しんだ語句や表現を書き写すこと、③例文を参考にその一部の語を自分が表現したいものに置き換えて書くことである。注目すべきは、これまでなかった細かなステップを踏んで、丁寧な文字指導を行い、文字への抵抗感をなくすることである。

そして3点目は、中学校英語科への接続である。これまで小学校外国語活動と中学校英語科は別物という意識があった。しかし今回、小学校で先を見据え、どこまで達成するかが明示されたことにより、中学校側が何を踏まえて指導すればよいか明らかになった。一貫した英語教育への道筋が開けた意味は大きいと考える。

イラスト ひらた ひさこ <http://kore.mitene.or.jp/~twins7yh/>

第17回

地球となかよしメッセージ

「地球となかよし」という言葉から感じたり、考えたりしたことを、写真(またはイラスト)にメッセージをつけて表現してください。

◎主催/教育出版 ◎協賛/日本環境教育学会 ◎後援/環境省、日本環境協会、全国小中学校環境教育研究会、毎日新聞社、毎日小学生新聞

教育出版

「地球となかよしメッセージ」事務局

TEL 03-3238-6864

<http://www.kyoiku-shuppan.co.jp>

作品募集
(2019年7月1日
～9月30日)



*第16回(2018年度)作品のお問い合わせについても、「地球となかよしメッセージ」事務局へ。

「書」の力とは

書道というとなにか構えたように聞こえますが、私は子どものころから文字を書くのが大好きで、家の障子などに白いところがあったら、いつもなにか書いていました。文字を書くことが習慣になっていきました。その習慣は今も続いています。墨をすり毛筆で無心に漢字を書くことは、一種の瞑想に近いかもしれません。

私は寺内にある幼稚園の理事長もしていますが、(精神的には)生活の中心は書道、お寺は基本的な生活を行う場所と、とらえています。

書道の教師としては、長年、高校の生徒や大学生と接し、その中で自分自身がいろいろと学ぶことが多かったような気がします。

先日、最先端のデジタル分野で文化勲章を受章された方に書を指導する機会がありました。さぞや日々パソコンを駆使し作業されて



ているのだろうと思っておりましたが、日頃は手書きで文章を起し、清書用にワープロを使用するそうです。それを聞いて

てなにかホツといたしました。デジタル化の波は避けて通ることはできません。むしろ社会の発展や生活の利便性の向上のために必要不可欠なことです。ただ、逆にこのまま際限なく行き着くところまで行ったらどうなるのだろうという怖さもあります。それを引き戻す力が「書」にあるのではないかと感じています。

書道を通じた子どもたちの学びと成長

私は書が好きだから書をやっていきます。「書」にふれることによって、そこから学ぶことや人格形成につながることもあるでしょう。ただ、まずは「好き」になることが大事なのではないでしょうか。小学校の英語教育についても同じような気がしています。人間というものは、それが本場に必要場面になれば必死に身につけようとします。むしろ学ぶ姿勢なんだと思いますよ。生まれも育ったところも歴史の重みのあるところだけに、まずは日本の歴史を学んでほしいと願っています。

書に現れる人格

自国の歴史を学び、先人たちの知恵や思いにふれることが子どもたちの創造性や感受性を育むことにつながっていくと思います。それには心のゆとりも必要ですね。書道の歴史をひも解いていくと、日本の伝統文化の一端が見えてきます。おもしろいもので字はその

人の人格も映し出します。特に毛筆はハッキリとわかります。書を書くこと、書道を通して子どもたちが心豊かになれるかは簡単に結びつけることはできませんが、書道体験を通して日常の決まり事を守ることを習慣化していくことはできます。上から下、左から右への筆順、ハネ、トメの規則性などから、ボールペンとは異なった所作にも心が現れます。学校現場では新年の「書初め」で初めて毛筆にふれる児童もいるかもしれませんが、もっと毛筆指導を充実させたいですね。最近では外国の方が日本の文化伝統として毛筆に興味をもたれ、私のところに指導を受けに来ることが多くなりました。

教える育てるその先へ

今、先生方は忙しい日々を送られていると思いますが、卒業後も教え子が訪ねてきてくれる喜びを味わうと、教える育てることをやめられなくなるんです。学校の教育現場にいらっしゃる先生方は、さまざまな苦労もありませんかと思えます。でもたいいの悩み事はいずれ終わって、必ずほっとする時間がやってきます。書と向き合うことで、そんな時間を見つけてくれたらうれしく思います。それを忘れずに、これからも取り組んでいっていただきたいと、そしてさらに「その先」へ進んでいっていただきたいと思います。

まがみにんこう 昭和18年(1943年)生まれ。京都教育大学名誉教授。日展会員(書)、日展文部科学大臣賞(2017年)受賞。建仁寺塔頭、正伝栄源院住職。

Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

- ◆ 中江有里さんの巻頭インタビューでの「読書ほど人と人とのコミュニケーションを自然な形で学べるものはない」に全く同意見です。楽しく読ませていただきました。(山口県 T.T)
- ◆ 檜原学園の活動に、地域の伝統技能を継承する重要性和子どもの育成の理想の姿を見ることができました。(岩手県 T.H)
- ◆ 今号の内容は現場ですぐに生かせるものが多くとても良いと思いました。(愛知県 S.H)

なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進歩や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。